

## 令和の大蔵経と次世代人文学

本研究は、研究媒体のデジタル化（DX）と人工知能（AI）が共同して急速に創成しつつあるあらたな研究環境において、日本の人文学が対応すべき要件を摘示するとともに、それらを実現するデジタル学術空間のモデルを構築し、人文学の伝統的営為を発展的に再編するための具体的道筋をしめす――

2025.12  
Collaborative  
Research Data  
Infrastructure  
for the Humanities

第 3 号

公式サイト



<https://reiwadzkhii.asia/>

<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/deed.ja>

## 1 令和の大蔵経と中国禅籍

●石井清純 [駒澤大学]

まずこの場をお借りして、特別推進研究「デジタル研究基盤としての令和の大蔵経の編纂」に協力させていただいていることに感謝申し上げます。この研究課題の推進する「人文情報学」については、前身となる（基盤研究S）「仏教学新知識基盤の構築―次世代人文学の先進的モデルの提示（課題番号：15H05725）」（代表：下田正弘）より連携させていただきましたが、つねに学ばせていただくことばかりでした。

### 禅籍のデジタル化

私の専門である禅研究におけるデジタル化の流れは、管見によればウルス・アップ編『ZenBase CD1』（花園大学国際禅学研究所、1995、CD-ROM）が嚆矢といえます。これは『大正新脩大蔵経』より、中国禅籍を抽出してデジタル化したものでした。この成果は、禅籍を「口語」として読解するという、新たな流れに大きく資するものだったといえます。

この頃の仏典デジタル化の流れは急激に加速していきます。同じく1995年、大蔵出版からCD-ROM版『大正新脩大蔵経』がリリースされ、前後しますが1994年には大蔵経テキストデータベース研究会（SAT）が、1998年には中華電子仏典協会（CBETA）がそれぞれ発足しています。

禅の文献学的な研究には上記のデジタルテキストが大きな役割を果たしました。ただそれらのほとんどが、従来の大蔵経を単独でデジタル化するものであり、禅籍に関しては、ほぼ『大正新脩大蔵経』に依拠していました。禅の文献学的研究に関していえば、それらはいくつかの問題点ははらんでもいたのです。

### 禅籍の底本と校訂

じつは『大正新脩大蔵経』に収録される禅籍は、底本の

新しいものが多いのです。例えば、『景德伝燈録』<sup>けいとくでんとうろく</sup>を例に取れば、1004年の刊行後、1011年に大蔵経に編入されました。このように宋代に入蔵を果たしているにもかかわらず、『大正新脩大蔵経』には、元代の1316年に刊行された延祐版が収録されているのです。

他にも、『碧巖録』<sup>へきがんろく</sup>や、『宏智録』<sup>わんしろうく</sup>、『無門関』<sup>むもんかん</sup>等の主要な公案集（著名な禅問答や禅僧の逸話集）も、江戸期の刊写本が底本となっています。

このような底本の問題はかなり重要で、多くの祖師が、引用や祖述を用いて自己表現をするテキストを読解するのに、没後の、引用し得なかった原典を用いて分析考察するという、リスクの高い研究が続けられてきたといえます。

そういう意味でこの特別推進研究において、宮内庁版をはじめ、多くの大蔵教と比較校訂する作業が始まったことは、まさに禅研究者にとっての悲願だったともいえます。

柳田聖山が、5年の歳月をかけた『祖堂集索引』（京都大学人文科学研究所、1984、上中下全3冊）を完成させたその年に、京都大学大型計算機センターで開発していた『東洋学文献類目』データベース（CHINA3）に基づく冊子体が刊行されました（安岡孝一『『東洋学文献目録』編纂の歴史―CHINA3、2003参照）。その流れをうけた「解題」には、「わたしの「索引」3冊は、原著より1000年後、最初の仕事であると共に、古風な仕事の最後の記念になるであろう。」（『祖堂集索引』下冊「解題」1579頁）と記されています。このたびの「令和の大蔵経」プロジェクトは、『祖堂集索引』の特徴である一字索引の業績を引き継ぎつつ、まさにこの預言通りの、「次世代」の研究をもたらすものであることを確信しております。

## 2 増上寺三大蔵のユネスコ「世界の記憶」国際登録とその意義

● 柴田泰山 [浄土宗総合研究所研究員]

### 増上寺三大蔵とは

2025年4月17日の夜、ユネスコ本部から増上寺三大蔵が、「増上寺が所蔵する三種の仏教聖典叢書」としてユネスコ「世界の記憶」に国際登録されたと連絡が入った。増上寺三大蔵とは、東京都港区に所在する浄土宗大本山増上寺所蔵の、

- ①中国、南宋時代（12世紀）に開版（版木が作成）された思溪版大蔵経 5,342帖
- ②中国、元時代（13世紀）に開版された普寧寺版大蔵経 5,228帖
- ③朝鮮、高麗時代（13世紀）に開版された高麗版大蔵経 1,357冊

という三種の大蔵経である。

この三大蔵は江戸幕府初代将軍である徳川家康が全国から収集し、そして寄進したものである。家康は大蔵経保持の本来の目的のまま、仏教の智慧と慈悲の象徴として、また徳川の治世の永続を祈願して、これら三種の大蔵経を増上寺の源誓存心げんよそんのおうに対して寄進している。おそらく家康は日本国内での大蔵経刊行を目指し、日本からインドや中国や朝鮮半島に対して、日本製大蔵経の輸出を考えていたことであろう。

### ユネスコ「世界の記憶」への挑戦

2021年7月、ユネスコが「世界の記憶」登録の受付を再開したことを受け（2017年に新規登録が凍結されていた）、2021年10月12日に浄土宗および大本山増上寺の共同名義のもと増上寺三大蔵をユネスコ「世界の記憶」に登録すべく文科省に申請を提出し、同年11月10日に政府がユネスコに正式に本件を申請する旨が通告された。そして11月29日、文科省からパリのユネスコ本部に申請書類が提出されたのである。

しかし2022年10月上旬、突如として「ユネスコからrejectの報告があった」と文科省から通達を受けることになる。そこで急ぎ、下田正弘氏や永崎研宣氏に相談し、

申請書を全面的に書き直し、指定された期日までに再提出することとした。この2022年11月の再提出は再審査の時間がないということで、2023年4月17日にユネスコ中委員会で採択されず、ユネスコ「世界の記憶」国際登録[2022-2023]における非採用が決定することとなった。

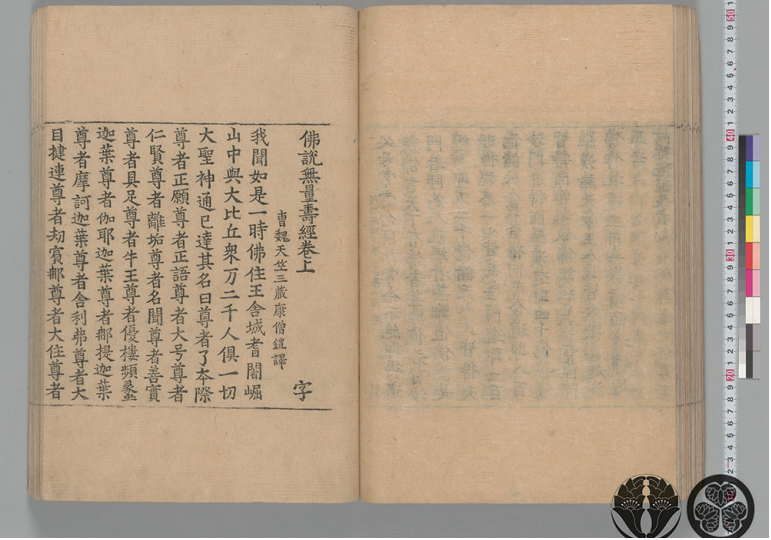
2023年6月28日、文科省のサイトで「ユネスコ「世界の記憶」国際登録の国内申請募集」が発表された。この発表を受け、再度の申請を決意し、2024年8月に文科省に申請書類を提出した。その後、国内推薦の決定を経て、同年11月24日に関係書類一式を文科省に提出し、そのまま文科省からユネスコ本部へと提出された。

そして2025年4月17日の夜、ユネスコ本部から増上寺三大蔵がユネスコ「世界の記憶」に国際登録されたと連絡が入った。増上寺三大蔵のデジタル化の企画（増上寺「三大蔵」デジタルアーカイブ [https://jodoshuzensho.jp/zojoji\\_sandaizo/](https://jodoshuzensho.jp/zojoji_sandaizo/)）から10年、そしてユネスコ「世界の記憶」への最初の挑戦から3年8ヶ月という時間が経過していた。

この間、下田正弘氏や永崎研宣氏、京都国立博物館研究員の上杉智英氏の協力、University of California, Berkeleyのマーク・ブラム教授と同大学院の和田良世氏による英訳協力、関係省庁の助言、世界仏教徒連盟の協力などを受け、今世紀の仏教の歴史の中で、一つの到達点を示す成果となった。



【図1】 増上寺経蔵



【図2】増上寺「三大蔵」デジタルアーカイブで見る  
高麗版大蔵經 仏説無量壽經 卷上（部分）

https://jodoshuzensho.jp/zojoji/koryo/viewer/020/084/0196/020\_084\_0196.html  
(82 枚目)

### 二度の挑戦の意味

このように二度の挑戦を経て、増上寺三大蔵はユネスコ「世界の記憶」に国際登録された。正直なところ最初の申請で「世界の記憶」に国際登録されるものと簡単に思っていたが、世界での仏教や大蔵經に対する評価はとても厳しいものであった。非漢字文化圏の人々から見た膨大な漢字

文献としての大蔵經は、まったく読めない文字で書かれた文献資料でしかなく、いわば不可解な存在としてしか映らなかったのかもしれない。最初の申請は残念な結果となり、深い失意とともに、多くの反省を残すこととなったが、最初の申請の失敗経験は、二度目の申請の成功体験よりも学ぶところが大きいものであった。

われわれにとって大蔵經は仏教思想の精華であって、仏教的に至高の存在であることに何の疑いもない。しかし日本国内でどれほど貴重な文化財であっても、それが世界的文化財としてどのような価値や意義を有しているか、どうしても伝わりにくい。これが最初の申請で失敗した要因でもある。世界的な視座からすれば、大蔵經は『聖書』のようにメジャーな存在ではなく、東アジア文化圏の文化財としてしか見えていないのである。

### 大蔵經を未来へつなぐ

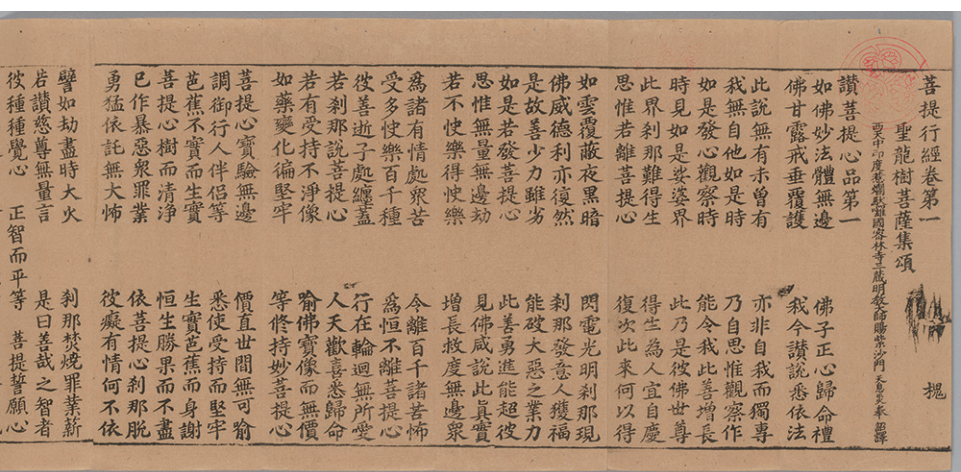
この現状を前に、われわれはどのようにして仏教や大蔵經の存在を世界に伝え、そして世界が評価するようにしていかなければならないのか。増上寺三大蔵のみならず、大

蔵經は仏教文化全体の時間的連続性と空間的連続性の座標軸であり、時間を超えて仏教の叡智を未来へつなぎ続ける存在である。大蔵經を未来に伝えていくために、今こそ大蔵經を世界に伝え、世界が大蔵經の価値を認知するように発信し続けることが求められている。

そのためにも、われわれが大蔵經そのものを信じ、大蔵經の内部に宿る「釈尊の存在」「釈尊の声」を信じ、大蔵經のパワーとエネルギーを世界に伝えるとともに、世界が認知した大蔵經の存在を日本国内でも広く伝えていかなければならない。今や現代の最先端技術のもとデジタルアーカイブにもなった大蔵經が、世界の精神文化史の一環として価値ある存在であることを、われわれ自身が深く受け止め、そして世界へと発信し続けることが、大蔵經を未来へとつなぐことでもある。今般、増上寺三大蔵がユネスコ「世界の記憶」に国際登録された意義は、この点にあるものと考える。

【図3】元版大蔵經（普寧蔵） 大般若波羅蜜多經 卷第三（部分）

参考 https://jodoshuzensho.jp/zojoji/yuan/viewer/001/001/03/mir\_001\_001\_03.html (2 枚目)



【図4】宋版大蔵經（思溪蔵） 菩提行經 卷第一（部分）

参考 https://jodoshuzensho.jp/zojoji/sung/viewer/085/495/01/mir\_085\_495\_01.html (2 枚目)

## 3 公開学術集会から——DHの最前線 ●朴賢珍・王一凡

本研究課題では、令和大蔵経編纂に関わる様々な要素について国内外で広く議論を行ない、仏教学のみならず人文学全体にも資することを目的として、仏教学及びデジタル・ヒューマニティーズに関する公開学術集会を開催してきている。また議論の場を広く公開するために、基本的にはオンライン同時配信も実施している。これらについて、以下に簡潔に報告する。

2025年10月13日(月曜)～17日(金曜) [参加]

●第65回 IRG (Ideographic Research Group) 会議

<https://www.unicode.org/irg/docs/n2815-ScheduleAgenda.html>

前号(「2. 仏典外字への取り組みと Unicode——SAT 大蔵経テキストデータベース研究会の仕事」)でも触れた通り、広州・暨南大学華文学院で第65回 ISO/IEC JTC 1/SC 2/WG 2/IRG 会議が開催された。IRG とは、計算機での文字表現(符号化文字集合)を規定する ISO/IEC 10646 (UCS) 規格の策定のうち、漢字部分(CJK 統合漢字/CJK Unified Ideographs)の議論を担当する専門部会であり、1993年より継続的に活動している。現在は原則として年2回(春・秋)に会議を行うが、COVID-19以降、春はオンライン・秋はハイブリッド形式で開催している。

今回の会議には中国・台湾・香港・マカオ・韓国・ベトナム・米国・英国の代表とともに、SAT 大蔵経テキストデータベース研究会(以下 SAT)から王一凡が出席したほか、中国国内から関心のある機関所属や個人の参加者が多くみられた。昨今の外交情勢のあおりを受け、議長(Convenor)がオンライン参加という形式ではあったが、変わらず議事日程いっぱいまで活発な議論が交わされた。

日程の多くは最新の追加候補漢字(IRG Working Set 2024)関連の審議に充てられた。UCSの中で、漢字と絵文字のみが継続的に符号位置(つまり字種)追加が行われる領域であるが、中でも漢字は数年おきに各代表から募集した5,000字程度の巨大な追加提案が扱われる。今回もその中から200件を超える指摘事項が集中的に審議された。

加えて、重要な問題として、IRG 作業文書の更新や、近年必要性が高まる漢字部品(component)・混種字(hybrid character)の課題が取り上げられた。IRGは昨年議長の交代を機に、文書や作業工程の電子化と効率化を推進しようとしている。また、混種字とは非漢字部品を含む漢字様文字の通称で、SATも合略仮名などで関係が深いため、今後も関心を持って議論に参加していく予定である。

2025年10月21日(火曜) [共催]

●DHセミナー「人文学における数量的手法に関するセミナー」

<https://sites.google.com/view/dhseminar2025-10/>

『人文学のための計量分析入門——歴史を数量化する』(クレール・ルメルシエ、クレール・ザルク著、人文書院)の邦訳刊行を機に、歴史学における計量分析の射程と、生成AI時代における歴史研究の新たな可能性を検討するDHセミナーが、慶應義塾大学およびオンラインのハイブリッド形式で開催された。

前半では、訳者の長野野一氏(東京大学)が同書第4章で扱われる「回帰分析」を手がかりに、19世紀パリの徒弟雇用や1980年代フランスにおける外国人営業許可の分析を事例として、回帰分析が「他条件を統制した上で歴史的要因を推測する」ための有力な手法であることを説明するとともに、多重共線性

などの注意点にも触れた。また、固定効果モデルを用いた近年の日本史研究や、複数史料を統合するデータベース構築など、計量分析が広がりつつある研究動向にも言及した。

後半では、石田健氏(The HEADLINE 編集長)がAI コーディングエディタ「Cursor (<https://cursor.com/ja>)」を用いた実演を行った。一橋大学の戦前期経済データを題材に、自然言語での指示のみでデータ整形から可視化、簡易な回帰分析までを短時間で実装する「パイプコーディング」のプロセスを紹介し、AIがプログラミングの障壁を下げ、仮説検証のサイクルを効率化し得る現状を示した。

総合討論では、データ構築の担い手をめぐる論点が提示された。長野氏が「入力作業の過程にこそ発見がある」として自らの入力を重視する立場を述べた一方、石田氏は非アカデミアとの分業によるアーカイブ化の加速や、若手研究者のキャリアパス拡張の可能性を指摘した。

本セミナーは、計量分析という手法の再評価にとどまらず、生成AI時代の歴史研究がどのような戦略を採るべきかを考える上で、重要な示唆を与える機会となった。

2025年11月30日(日曜) [主催]

●第1回令和の大蔵経編纂作業会議 @ 京都

本特別推進研究の基盤となるテキストデータ構築を担う、京都エリア(大谷大学・佛敎大学・龍谷大学)の作業者を対象とした「第1回作業会議」が、大谷大学において対面形式で開催された。本会議は、OCR/TEI 作業の現状共有と連携強化を目的として企画された。当日は、研究代表者の下田正弘、会場校代表として編集委員の木越康氏による趣旨説明に続き、研究分担者の永崎研宣らが講師を務めた。

本会議は、普段は個別に作業を進めている作業者が一堂に会し、大学の垣根を越えた「横の繋がり」を構築するとともに、作業効率向上に向けた具体的なフィードバックループを形成した点においても、プロジェクト運営上意義深い一歩となった。

2025年12月20日(土曜)～21日(日曜) [主催]

●仏教学とデジタル・ヒューマニティーズ国際シンポジウム「DX-AI 時代における人文学の意義と研究基盤の構築」

<https://sites.google.com/view/buddh2025/>

東京国際フォーラムおよびオンラインにて、本特別推進研究主催による国際シンポジウムが開催された。

初日はDHインフラ構築に焦点を当て、歴史的文書のAIテキスト化プラットフォーム「Transkribus」の共同創設ディレクターでもあるメリッサ・テラス教授(エディンバラ大学)による基調講演のほか、日本の人文学データ構築を牽引する主要機関の研究者が登壇し、デジタル研究基盤の構築と課題について議論した。二日目は、研究代表者・下田正弘および研究分担者・永崎研宣による基調報告、国内20以上の機関によるポスターセッション・デモ展示が行われた。午後は「仏教研究とデジタル・ヒューマニティーズ」をテーマに、海外の専門家らが、仏典研究の最先端事例を多角的に報告した。

次世代人文学の基盤構築に向けた具体的な道筋を示し、プロジェクトの進展に弾みをつける成果となった。(詳細は次号)

DHの最新状況をキャッチアップするためのイベント情報は「人文学情報月報」をチェックしてください